氏　　名	バッタ ブワン サンカール
氏　　名	BHATT, BHUWAN SHANKAR
学 位 の 種 類	博　士（学術）
学 位 記 番 号	甲　第 ２４１ 号
学位授与年月日	２０２３年７月１４日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	Inclusion in Higher Education: Exploring the Experiences of Nepalese College Students with Disabilities 高等教育におけるインクルージョン ：障害のあるネパールの大学生の経験を探る
論 文 審 査 委 員	主　査　　教　　授　　西　村　幹　子 副　査　　特任教授　　笹　尾　敏　明 副　査　　教　　授　　大　川　　洋

論文内容の要旨

教育における包摂性は、世界のあらゆる地域において達成が難しいとされるテーマである。ネパール政府は、初等教育から高等教育に至る教育課程において、その包摂性を促進するため、障害のある個人に対して柔軟な入学制度、財政支援、およびアクセスしやすいインフラ整備等、障害者に優しい政策を実施するよう努めている。しかし、公立大学の文脈においては、これらの学生が直面する課題に十分な注意が払われてこなかった。高等教育機関における障害のない他の学生と比較して、障害のある学生については、個人の学術的関与と社会的関係性の問題に直面する可能性があるが、個別的な支援アプローチに焦点を当てた従来の研究では、こうした側面が十分に明らかにされてこなかった。本研究では、さまざまな教育レベルやプログラムにおいて一貫してみられる、包摂性の概念に関して普遍的な曖昧さがあることを問題として取り上げる。特に、現行の個人主義的な概念枠組みのアプローチは、障害者の個別のニーズに対処することに重点を置いており、社会的関係性や学術的な課題を見過ごしている。こうした研究は、高等教育における「インクルーシブ・エクセレンス（包摂的な卓越性）」を追求するのに欠かせない人々の社会的帰属意識と学習参加について集団的相互作用の視点を用いて理解することの重要性を見過ごしてきた。

本研究の目的は、ネパールの高等教育の文脈における包摂性の概念について、具体的に障害のある学生と関係者が有する経験と認識を理解することである。リサーチクエスチョンは、包摂性の概念、相互作用の実践、および、相互作用が障害のある学生の包摂にどのように影響していると認識されているのかを理解することに焦点を当てた。概念枠組みとしては、ケイパビリティ・アプローチ、インクルーシブ・エクセレンス・モデルを用い、これらの理論の重要な側面と概念的制約を指摘した上で、新たな枠組みを提案した。本研究は、質的ケーススタディを用い、ネパールの2つの公立大学の多様な関係者からデータを収集した。関係者については有意抽出法を用いて対象者を特定した。本研究に先立ち、全ての対象者（n = 620）に対してサーベイ調査を実施し、文脈や包括性の状況に関する基本情報を収集し

た。2022年3月から6月にかけて実施された本調査では、半構造化インタビュー、フォーカス・グループ・ディスカッション、文書レビューを採用した。本研究のインタビュー調査には、障害のある学生（n = 22）、障害のない学生（n = 12）、教員（n = 10）、および管理者（n = 7）のデータが含まれている。

本研究の結果は、ネパールの高等教育における包摂性が、障害に配慮したインフラ、学習リソース、障害のある学生への経済支援、および障害に対する前向きな考え方を促進することに焦点を当てた個人主義的な概念を強調する傾向があることを示している。これは、従来の理論と一致している。興味深いことに、本研究の対象者の大多数は、協力、社会的帰属意識、尊重と尊厳、学習への参加と自己効力感、および職業的説明責任を含むいくつかの重要なケイパビリティを、集団の利益として特定した。相互作用の実践に関しては、ほとんどの研究対象者の経験が、障害のある学生との相互作用に対する前向きな態度を示したが、大学メンバー間の相互作用はあまり実践されていなかった。さらに、相互作用が持つ影響についての認識は、障害のある学生と他の利害関係者の学術的および社会的機能を積極的に向上させると認識されていることが判明した。結論として、本研究は、ネパールおよび国際的な高等教育の文脈において、インクルーシブ・エクセレンスを発展させるには、既存の高等教育政策、公立大学の実践を見直し、将来の研究が集団相互作用の概念枠組にケイパビリティを包含する必要性が示唆された。

論文審査結果の要旨

Bhuwan Shankar Bhatt 氏の最終論文審査は、2023 年 5 月 16 日、午後 1 時 3 分から 2 時 33 分までオンラインの Zoom により行われた。ICU キャンパスの教職員・学生も招かれ、10 人が参加した。審査においては、まず Bhatt 氏より 30 分程度でパワーポイントを用いて論文の目的、先行研究、研究の意義、研究デザイン、結果、理論的、実証的な貢献について発表が行われた。その後、審査委員会委員より質疑応答が行われた後、参加者より質疑応答が行われた。最後に審査委員会委員より本研究の意義や本人の努力について肯定的なコメントが述べられた。

候補者および聴衆が Zoom から退出した直後、審査委員は論文審査について議論し、付与される成績についても合意した。審査委員会は、Bhatt 氏はコロナ禍において独自のデータを収集し、包括的に議論と独自の貢献についてよくまとめ、教育社会学の領域で賞賛されるべき貢献をしたという共通見解をもった。審査委員のうちの二人は過去数年にわたり Bhatt 氏の指導および審査を担当し、目覚ましい改善および本研究の意義が認められたことを確認した。すべての審査委員は、Bhatt 氏は本学の博士号に要求される基本的な要件をすべて満たしていたと結論づけた。

世界における高等教育研究の中でも数少ない研究領域であり、おそらくネパールでは最初の事例研究となるだろうことが認識された。本研究の長所と短所や限界についても特に現時点で修正すべき点は殆ど提案されず、全体的に良く書かれており、修正点は確認されなかった。

Bhatt 氏の研究の重要な貢献は、独自の概念的枠組みを構築したこと、複数のステークホルダーのデータを収集したこと、および重要な理論的、実践的な貢献をしたことに集約される。以下、具体的な貢献について記載する。

第一に、本論文が提案する包摂性を分析する視覚としての「集団としての相互作用」という概念は、教育社会学とコミュニティ心理学を横断する、独自の学術的に有用な視点を提示している。ケイパビリティ・アプローチと高等教育において用いられる包摂的な卓越性（Inclusive Excellence）という概念の弱点を指摘した上で、集団的なケイパビリティとして包摂性を捉える代替的な視角を示した。既存の高等教育における障害に対する理論や研究に対するアプローチは、障害のある生徒への個別のインタビューを中心に据えてきた。Bhatt 氏は、「個人のニーズ」という概念自体がすべての学生と大学コミュニティに裨益するケイパビリティの相互作用的な要素を見逃してきたと指摘する。本論文は、この独自の視点で、大学関係者がいかに相互的に関わり、高等教育における環境を捉え、どのような関わり方がケイパビリティの諸側面を強化、あるいは阻害するのかをよりダイナミックに分析している。

第二に、Bhatt 氏は、独自の概念的枠組みを基盤に、大学関係者間の相互作用のタイプやそれの捉え方を特定するために独自の複数のデータを取得した点が斬新である。ネパールの 2 つの国立大学において、障害のある学生、障害のない学生、教育職員、事務職員からデータが収集された。この豊か

なデータに基づき、相互作用や包摂性における認識と行動のギャップを特定した。特に、事務職員が障害のある学生にニーズを狭義に定義しているのに対し、障害の有無にかかわらず、学生や教育職員はより人間的、社会的な側面で相互作用を捉えていたことが判明したことは意義のあることである。また、障害のない学生が障害のある学生との相互作用を学術的な側面から主に捉えているのに対し、障害のある学生は、社会的な生活、キャリア計画、情報共有など、より広い視点で相互作用の意味を捉えていることも判明した。このような認識ギャップは、相互作用は起きる文脈の理解やそれらの文脈が、異なる関係者の期待によって相互作用をポジティブにもネガティブにも変えられることを示している。

第三に、本研究の教育社会学における理論的、実践的貢献は特筆に値する。多くの研究が、これまで隠れたカリキュラムや正規教育システムの分析を通して障害のある生徒・学生のニーズに注目し、それらを明らかにしてきたが、関係者間の相互作用に注目し、各関係者の認識、期待、行動を明らかにしたという点で、本研究は、よりダイナミックに相互作用論の理論的視角に基盤を起き、それを強化することに成功した。単に障害のある学生とその他の関係者の相互作用に注目するのではなく、異なる関係者間の相互作用を捉えることで、障害の有無にかかわらず、相互作用を阻害する要素を明らかにしたことにより、複数の関係者たちが包摂性という概念を見直し、すべての人に裨益する包摂的な環境を創ることにおいて自らの当事者性を見出すことに繋がる。Bhatt 氏の理論的アプローチは、行政者や政策決定者が、包摂的な教育環境を考える際に、特定の対象者に対してではなく、すべての人にとっての包摂性を実現するという視点を持つことの実際的な重要性を提示している。環境がすべての人にとってのものであり、集団的な相互作用の集積として捉えられない限り、包摂的な教育は実現することが難しく、あるいは特定の対象者に対する追加的なものとの認識に留まる危険性がある。

審査委員会において唯一出た課題の指摘は、質的調査により得られたインタビュー調査結果を用いて、関係者間の認識ギャップにある背景要因などについてもよりニュアンスのある説明が加えられるとより良かったという点である。ある相互作用をポジティブに捉える人とネガティブに捉える人にある背景要因や認識ギャップの根底にある社会的な文脈などがよりニュアンスをもって捉えられると、高等教育という場においてより良いポジティブな相互作用が生まれるヒントを得ることができよう。コロナ禍のためできなかった観察法やインフォーマルなインタビューを用いて、授業観察を行い、教室内で用いられている教授法や異なる関係者の相互作用を描写できるとより良かった。審査委員会は、今後の研究として、Bhatt 氏にこのような観点から理解を深める研究を継続してもらいたいと考えた。

以上のように、審査委員会は、本論文の評価として B が相応しいと判断した。審査委員会は、Bhatt 氏の誠実な努力と教育社会学、高等教育研究とその実践への貢献を認め、心からの祝福を以て博士の学位を授与することで合意した。

以　上

Summary of Doctoral Dissertation

Inclusion in education is an elusive quest in all social contexts in the World. The government of Nepal strives to foster inclusion for individuals with disabilities in mainstream education, from primary to higher levels, by implementing disability-friendly policies encompassing flexible admissions, financial support, and accessible infrastructure. However, the challenges these students face within the context of public colleges, among other issues, have yet to receive sufficient attention. Compared to their non-disabled counterparts in higher education, individuals with disabilities may confront academic engagement and socio-relational issues that previous research focusing on the individualistic approach cannot adequately explore.

The problem of the field of study on inclusion in education or inclusive education lies in the pervasive ambiguity surrounding the concept of inclusion, which appears consistent across various educational levels and programs. Additionally, the prevailing individualistic approach concentrates on addressing the unique needs of individuals with disabilities, overlooking socio-relational and academic concerns. Nonetheless, this study underscores the significance of embracing the notion of collective interaction to understand social belonging and learning engagement for all in the pursuit of inclusive excellence in higher education.

The purpose of this study was to explore the experiences and perceptions of students with disabilities and stakeholders regarding inclusion in the Nepalese higher education context. Research questions focused on understanding inclusion, the practice of interaction, and the perceived influence of interaction on the inclusion of students with disabilities. The research questions were grounded in the capability approach, the inclusive excellence model, and a conceptual framework that addresses critical aspects and conceptual limitations of these theories.

A qualitative case study was chosen for this research, with data collected from a diverse group of participants from two Nepalese public colleges. A purposive sampling approach was employed to identify different participants. Prior to the main study, a pilot xvi survey was conducted among all participants (n = 620) to gather basic information about the context and the inclusion landscape. The main study, conducted from March to June 2022, utilized semi-structured interviews, focus group discussions, and document reviews. Participants in the main study included students with disabilities (n = 22),

students without disabilities (n = 12), instructors (n = 10), and administrators (n = 7).

The findings of this study reveal that inclusion in Nepalese higher education tends to emphasize individualistic concepts, focusing on disability-friendly infrastructure, learning resources, and financial support for students with disabilities, as well as promoting a disability-positive mindset, in line with prevailing theories. Interestingly, the majority of participants identified several crucial capabilities, including cooperation, social belonging, respect, and dignity, learning engagement and self-efficacy, and professional accountability, as collective benefits. Concerning the practice of interaction, most participants' experiences demonstrated a positive attitude toward interacting with students with disabilities; however, interaction among college members was infrequently practiced. These was also a statistically significant gap in perception on inclusive environment among students and administrators and positive and negative interaction were experienced differently by students with disabilities and non-disabled students. The perceived influence of interaction was found to positively enhance the academic and social functioning of students with disabilities and other stakeholders.

In conclusion, this study asserts that inclusive excellence can be developed in the context of Nepal's and international higher education by suggesting that existing higher education policies, public college practices, and future studies reframe and reconsider the concept of collective interaction, encompassing fundamental capabilities.

Summary of the Dissertation Evaluation

The final evaluation of Mr. Bhuwan Shankar Bhatt's doctoral dissertation was held between 1:03 p.m. and 2:33 p.m. on May 16, 2023 using the online services of Zoom. The proceedings started with an open forum to which any interested member of the ICU campus was invited. During the session, Mr. Bhatt provided a short and well-prepared PowerPoint presentation, outlining the highlights of his dissertation study including the research background, comprehensive review of literature, research significance, research design, results, followed by careful discussion of theoretical and empirical contribution of the study. After the Dissertation Committee Members asked a few questions and some comments, the floor was made open for a question and answer/comment session, to which any member of the audience was invited to contribute. Finally, the Dissertation Committee Members made a few final comments.

Immediately after the Candidate and audience were dismissed, the Dissertation

Committee deliberated about the dissertation. The Dissertation Committee then deliberated on a final grade to be assigned to the submitted dissertation. The Committee members felt that he has made a commendable contribution to the area of Sociology of Education with the original data collection during the pandemic and complied his arguments and contribution in a comprehensive manner. Two of the Committee Members have closely observed the evolution of this dissertation project over the past several years and acknowledged his great improvement and significance and findings of this research project reported in the dissertation. All the committee members felt that Mr. Bhatt's project met all the fundamental requirements for the degree of Doctor of Philosophy (Ph.D.) at International Christian University.

It was recognized that this dissertation project is one of the very few field studies done in higher education in the world and perhaps the first in Nepal. Only a few comments and suggestions were made from the committee members regarding the strengths and limitations of the study reported and interpretation. Overall, the dissertation was written well, requiring no major or minor corrections.

Some important contributions of Mr. Bhatt's research will be pointed out here with respect to a unique conceptual framework, rigor in data collection targeting multiple stakeholders, and important theoretical and practical contributions.

First, his concept of collective interaction to examine inclusion is unique and academically viable in a sense of bridging between Sociology of Education and Community Psychology. By indicating weakness of the Capability Approach and the concept of Inclusive Excellence used in higher education, Mr. Bhatt presents an alternative perspective to understand inclusion as collective capabilities. Due to the past focus of theories on and approaches for disabilities, the peace-meal interventions for students with disabilities have been dominant in special needs education or support in higher education. Mr. Bhatt indicated that the very notion of "individual needs" have overshadowed the importance of interactive elements of capability that benefit all students and university community. This unique angle was used to examine how stakeholders interact and perceive higher education environment and what kinds of interaction enhances or impedes what dimension of capabilities in a more dynamic way.

Second, based on his conceptual framework, Mr. Bhatt collected unique and multiple data to identify different types of interaction and perception among stakeholders. Data

were collected from students with and without disabilities, teaching staff, and administrative staff at two public colleges in Nepal. Wish this rich data, he has successfully identified the perception and behavioral gap in interaction and inclusion. It was especially meaningful for this study to indicate the perception gap between the administrative staff and students whereby the administrative staff tends to have a narrow sense of individual needs of the students with disabilities while other stakeholders perceive humanistic and social aspects of interaction among themselves. It was also revealed that students with disability tend to have a broader perspective of the meaning of interaction with others in social life, career planning and information sharing while students without disabilities tend to focus on interaction with students with disabilities in an academic aspect. Such perception gaps indicate the importance of the context in which interaction happens and how such context can create both positive and negative ways depending on different stakeholders' expectations.

Third, the study's theoretical and practical contributions are worth noting in the area of Sociology of Education. While a lot of attention has paid to reveal the needs of students with disability by analyzing a hidden curriculum and formal education system, the case study that focuses on interaction among stakeholders and each stakeholder's perception, expectations, and behaviors contributed to theoretical underpinning of social interactionist approach in a more dynamic way. Rather than just focusing on interaction between students with disabilities and others, this study depicted interaction among different stakeholders that hinder interaction across stakeholders regardless of disability and that very perspective led to multiple stakeholders to revisit their concept of inclusion and to put themselves in the center of creating an inclusive environment that benefits all. Mr. Bhatt's theoretical approach may have practical contribution to how administrators and policy makers should look at making an environment more inclusive not for a particular target group, but for all. Unless the environment is for all and seen as accumulated collective interactions, inclusive education may be hard to realize or regarded as something additional for a particular group of people.

The only reservation that was raised in the Dissertation Committee was an insufficient use of in-depth qualitative data to explain more about perception gaps among the stakeholders. More nuanced explanation as to what makes them describe or perceive positive or negative may be useful to deepen understanding of the root-cause of perception gap and the hint for a better and positive interaction in the higher education setting. An observation of the classroom pedagogy and interaction among different

stakeholders may have been useful, which was not possible due to the pandemic. The Committee hopes that he will be able to continue his search for such information and interpretation in the future academic endeavor.

As such, the committee agreed that this dissertation should be given a grade of "B". The committee also recognizes Mr. Bhatt's sincere efforts and dedication to the field of Sociology of Education as well as higher education research and practice and offers him our heart-felt congratulations for the hard-earned highest honor in higher education.